

本学会元会長の佐藤重夫先生（以下敬称略）は昭和30年、日本建築学会中国支部で論文「広島県比婆郡北部の古民家」（研究報告34号）を発表した。現在その論文は中国支部にも残っていないが、佐藤の残した資料の中に手書きの原稿と多数の写真を発見した。堀江家住宅と荒木家住宅について述べたものであるが、前号（156号）で（その1 堀江家住宅）を紹介した。本号ではその続編として荒木家住宅について報告するものである。

荒木家は堀江家の東方10数kmの位置にあり、地名は比婆郡比和町森脇である（第156号67頁の地図参照）。

中国支部発表の論文では、荒木家について4枚の写真と説明があったが、内容は簡単に終わっていた。ただ、佐藤の資料の中に未発表の写真や野帳があり、論文に書かれていない新たな知見を得ることが出来た。さらに後年、佐藤は新たに稿を起こして「県北の古民家―荒木家住宅―」を『広島県文化財ニュース』（111号、昭和61年9月）に発表した。本稿ではこれらを紹介し総合的に考察するものである。

（1）中国支部で発表した荒木家住宅の部分

「この家（荒木家住宅）も堀江家と同様の作りであるが、前者よりも大分整っている。規模も少し大きい。「にわ」を中心とした形はやはりこの地方での古い形を残している少例の一つである。畳敷の室あたりは後世のもので、一部に元の室跡がある他充分に昔のままの形を探ね難いが、太い柱の位置等全く堀江家と同様であり、後世の如く大黒柱等も殊さらのものとする点なく全てが同様の柱である点も同じである。この家は永禄3年（1560）に荒木主税貞勝が大和より来て居着いたと伝えられ（軍記）戦国時代末の武将の一人であったようである。その後土地の豪族の一人として代々神官を勤めて現在に至っている。高間たかまと称する神座を持つ神殿を奥の間と納戸の間に設けている点は一

般農家と違っておるがこの廻りの雑作の年代は後世のものようであった。」以上が論文の記述である。

荒木家住宅は昭和43年4月25日に国の重要文化財に指定された。荒木家は現在もご家族が生活されており、家の北東200mほどの所にある森脇八幡神社の神職を勤められている。

（2）『広島県文化財ニュース』111号

「県北の古民家―荒木家住宅―」

荒木家は家系では永禄3年（1560）に大和より移り住み、神官を世襲してきていると伝えられている。広い宅地が山麓に造られ、主屋は大きく西南西向きに桁行を面して平入りに建てられている。敷地内の北側に、南面して祈祷殿という小さい社殿があるのは神官の役目上であり、西南に田を持つ表に冠木門を建て、その南に便所がある。だやを右手に取り入れた主屋は、桁行10間半、梁間5間で、茅葺で廂まで葺き下した大きな屋根は、小さな妻を両端にかけた入母屋造りであり、古くは大戸右に壺便所があったと伝えている。主屋の中央より右手は奥に「だいどころ」として板床の座が張り出されているが、俗にいう大黒柱の位置から右手半分は土間（この家では「うすにわ」という）の部の古風を残し、この広い土間には太い柱を数多く持っており、桁行に5間もある太い梁を掛けるなど、梁組は極めて整った豪壮なものである。しかし、後の時代のこの地方に多く見られる井桁組のような作意のものではない。土間の下手、主屋右端、2間通りは「だや」の部とされ、「うすにわ」に開かれて妻側は全て土壁であった。「うすにわ」の裏側も古くは全て土壁であったと考えられる。

主屋の左手半分は座の空間で、現在は棟通りで表裏に分かれ、表側は「げんかんのま」8畳、「おくのま」8畳となっており、「げんかんのま」の裏に広い板床の部分が「だいどころ」にそのまま続き、「おくのま」の

裏手に「たかま」と称する一段高い座の板床の間を
はさんでその奥に「なんど」を持っている。また「なん
ど」と「だいどころ」との間の床の一部には「あだ
なんど」ともいうべき小室があった痕跡も見えるが、こ
れは一時的なものであったであろう。

現在はこのような間取りであるが、当初は床座の部
の妻側に「おくのま」とその裏に「なんど」の二室の
みがあって、「うすにわ」寄りの部分は全て開かれた「ひ
ろま」型の間取りと考えられる。このことはこの家屋
が極めて大規模な原形型の民家であることをよく示し
ている。このように平入りの主屋を古くは右半分を土
間として左側を床座とし、その床座の裏側を閉ざされ
た「おくのま」と「なんど」に表裏に分ける型は、板
座が「うすにわ」に開かれた住居空間を持つ古式をそ
のままに示していて、これは先ず第一にこの荒木家の
大きな特徴であり、重要さを示すものである。しかも
「たかま」が現在は神座に用いられているが、「なんど」
の妻側の雑作などが出来る前が全て壁であったことと
ともに、「なんど」と「たかま」はともに「たかま」の
「なんど」であったかも知れないことを示している。
あるいは「なんど」は一室の形で、出入りは「なんど
がまえ」のように敷居を上げた板戸建ての「なんど」
であったとも考えられなくもない。凡そ神座や仏壇な
どが設けられている初期は「おくのま」の妻側の廂部
に設けられるのが多く、歳神などの祭りは他の古家にも
その例が多い。そうして荒井家の場合、おくの間の
廂に廻り縁がついていること、(廂のままとも古くは考
えてもよい)、要するに「おくの間」の二面を外部に建
具で開けるようにしたこと、この家屋の当時としては
極めて進歩した考えを取り入れたことの特徴を見ない
わけにはゆかない。それは「なんど」や「だいどころ」
、「ひろま」形の広い床座の空間などと考え合わせ
て少々不思議なほどのことであったと思われる。この
「おくの間」の部分のみ柱など仕上げが^{かん}で、他は全
て手^{ちゆう}仕上げであることと考え合わせて、疑問も残る
ことである。「おくの間」の妻側奥より一間は古くは押
入の廂であり、「たかま」境は半間ごとの柱建の壁であ
ったといわれている。また「なんど」の「だいどころ」
寄りには二間半を二つ割にした幅で「あだなんど」と

もいうべき小部屋があった痕跡もあるが、要するに「ね
ま」としての完全に外光のない「なんど」が「たかま」
と「なんど」の部分の二室になるか、あるいは一室で
設けられており、それが「たかま」であったことも考
えられるわけである。

この「たかま」の疑問は、白市の木原家の「たかま」
や、広い板床の「にわ」にはなたれた空間の生活の場
のこと、また、竹原の吉井家に痕跡として残っている
木原家同様の「たかま」、及び庄原の田辺家に残存して
いる「たかま」などとの関連で考えて当時の生活様式
の民俗学的思考上極めて重要に思われることである。
吉井家も江戸期古くの家屋であり、田辺家もまた凡そ
同年代と考えられる。しかも、これらの家屋は寛文の
木原家よりは後れるものではあっても、何れも町家で、
しかも経済的上位の家屋であることを思うと、農家形
の荒木家の家屋も上層民家でしかも「たかま」がある
ことも一応考えられると、疑問を提起しているもので
ある。それは上屋柱が「なんど」の部分にのみなくな
っていることから、この部分の改造が十分に考えられ
るからである。

「げんかんのま」は現在は建具で閉ざされた室にな
っているが、これが後補であることは前述した。しか
し「げんかんのま」と「だいどころ」境の建具はどう
であったであろうか。建具そのものは古いものではな
くとも、また建て込み方が相違していても、ここに建
具で広い板床の生活空間を先ず表裏にわけるとは自
然であり、また他の多くの古家にその例を見るところ
であるから、ここが板戸であったか、他の建具であっ
たかは不明である。また、五枚建てか、四枚建てか、
そのあたりはいろいろ考えられよう。

次に荒木家でもう一つ大きな特徴は上屋梁が九通り
の下に柱が現在「なんど」の隅の部のみを除き他は全
部残存して石据えであるということである。しかも、
その上屋梁は四間もある長大なものが使用され、それ
に屋根の^きが^すが建て上げられ、棟木束が建てられてい
る。又首と束とは貫で中間が貫かれ、束は三本の貫で
桁行に結ばれている。極めて整理された構造で、それ
に廂が四周に設けられて、一つの茅葺屋根に葺き下ろ
している。また胴差なども全て太いもので、「おくのま」

まで全て胴差で固めてあり、上屋梁を受けている桁や桁行の梁なども大きく、柱との仕口は入念で、この建築物の程度は極めて上等である。こういったことは、よくこの建物をば、間取りのこと、その間取りと内容である17世紀、あるいはそれ以前の生活様相とのこと、そうしてなおこの建築物の上質であることなどを関連して考察することにより、荒木家住宅の意義は極めて大切であることが理解されてくる。言い換えれば、その昔の頃の家庭の生活はたいへん開放的で私生活は夜の生活のみであり、それは全く閉鎖された安静な「なんど」での就寝のみであり、夜分といえども「いろり」を囲んでの家庭生活は全て「ひろま」であり、昼の家庭生活のうち、家の中での生活も、もちろん「ひろま」と「にわ」であったことをよく示している。そこには近隣との生活も家庭一族の生活も融け合っており、家庭教育も、社会教育も、はたまた集落としての相談ごとにも適当に溶け合っていたに相違ないことが、この荒木家のような古民家を見ることによってよく解ることである。古民家の民俗学的意義もそのところにあるもので、古民家はただ民家建築歴史資料としての価値のみでないという高い広い意義を有しており、このことを忘れてはならない。

(昭和61年9月15日記)

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んでください。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ担当 古川修文

syu-bun@jcom.home.ne.jp